

研究テーマ 看護・介護職種における終末期カンファレンスと悲嘆尺度との関連

病 院 名 医療法人社団健育会 熱川温泉病院

研 究 者 もとやままこと ○もとやままこと 本山命(看護師) 丸石寛奈(看護師)

概 要

【研究背景】

丸石¹⁾らは4分割法に着目し終末期カンファレンスによって医療者のグリーフが軽減するかを調査した。終末期カンファレンスにより、思いを共有し、終末期患者に必要な看護を見出すことで、グリーフの緩和に繋がったと考察している。

しかし件数や参加人数が少なく、継続研究が必要である。

【研究目的】

療養病棟で、終末期カンファレンスを行い、患者の死後も肯定的な感情が生まれ、医療者のグリーフが軽減するのかを調査。

【研究方法】

1. 対象:療養病棟勤務する看護・介護職 計58名 うち同意が得られたのが31名 有効回答が31名 2. 期間:令和3年6月～9月 3. 手順方法:全人的に深く考察するため、ジョンセンの臨床倫理4分割法を用い手順書作成 4. 調査内容 1)属性:職種、経験年数、勤務形態、経験病棟・年数、近親者との死別、看取り経験の有無 2)患者との死別後の看護師の悲嘆尺度:18項目を5段階で評価 介入前後で実施 3)インタビュー 5. 分析方法:対応のあるt検定にて有意水準<0.05とした

【結果】

1)属性:勤務形態 常勤67.7%・派遣9.63%、パート22.5%、近親者との死別経験あり87%、看取り経験あり90.3%、終末期カンファレンス参加あり58%(18人) 2)患者との死別後の看護師の悲嘆尺度
悲嘆尺度:有意差なし、インタビュー:「もっと良いかわりが出来たのではないか」が「気づき」に変わった。デスカンファレンスでは振り返ることで「気づき」から「次へ生かす」ことが出来た。
何が出来るだろうという発想に変化した。

【考察】

有意差が得られなかった要因はパートや派遣等、制限のある職員が約30%存在し継続介入が困難であった。

また看護師は近親者での死別体験87%、看取り経験90.3%であり、終末期ケアへの取り組み姿勢が既に取れていたと推測する。

インタビューでは終末期カンファレンス・デスカンファレンスを重ねるにつれ、「気づき」から個別的なケアへ変化し、個別的なケアの提供に繋がった。

又、デスカンファレンスでは振り返ることで「気づき」から「次へ生かす」ことが出来、終末期ケアへ前向きに取り組めたのではないかと考える。

このように終末期ケアへの態度に変化が見られた。これは終末期カンファレンス・デスカンファレンスを通し個別的なケアを提供出来たことで、変化していったと考える。

【結論】

終末期カンファレンスにより思いを共有し個別的なケアを提供出来たことで、終末期ケアへの態度に変化が見られた。

【引用参考文献】

1)丸石寛奈:看護・介護職種における終末期カンファレンスと終末期ケア態度との関連 2021年